

それぞれの事情

神谷涼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガさんと至高の御方2名が、転移します。

モモンガさんは女性——かなりロリ寄りの少女になります。

というか転移する3人は全員女性になります。

原作を設定と言うか何というか、いろいろ大きく改竄しています。

ほんとにいろいろ寛大な気持ちでお読みください。

目次

1 : ヘロヘロよお前もか！	1
2 : るし★ふぁーは二度裏切る	15
3 : モモンガの眼が問題だ！	34

1：へろへろよお前もか！

「いやー、まさかモモンガさんが女の子だったなんて知らなかったよー」

サマードレスの黒髪少女——幼女が、儂げに笑う。

ボイスフィルターを外した声は、ぶくぶく茶釜にも劣らぬロリ声だ。

ただしこちらはガチな天然モノである。

「へろへろさんこそ、まさかですよ！」

ピンク髪の少女が疲れた目で、それでもにこやかに笑って答えた。

ふわりとしたロリータファッションのドレスは、育ちのよさを思わせる。

声もまた幼げな中に、凜とした貴族的なものを感じさせた。

「もう素顔見せちゃったし、モモンガさんも普通にしゃべってくれていいのに」

「私は基本でもこの口調ですの……」

幼女と少女の語らひは、いつもより円卓の間を華やかに見せていた。

異形種ギルド、アインズ・ウール・ゴウン。

思えば外見からして、人外オブ人外といった容姿のメンバーばかりだったこのギルド

で……この円卓の間にメイド以外の幼女や少女がいたことなどないのだ。

久しぶりの『ユグドラシル』。

サービス最終日、ギルドマスターたるモモンガからの「大事な話がある」というメールに。

大きな隠し事をしていたヘロヘロは、敢えていつもと違うアバターでログインした。

『ユグドラシル』に限らず、DMMO系コンテンツには、リアルのに近い姿が基本設定となっている。

いくらかの美化は可能だが、体型や色彩やパーツはリアルの姿から大きく変えはできない。

一度ログインした後で乗り換えたりはできないが、最初からログインは可能だ。

キャラクターデータも変わらない。

もつとも、『ユグドラシル』のようなファンタジーRPGで、リアルの容姿をわざわざ好む者などいない。

よほどリアルのに己に自信があるナルシストでなければ、苦しいリアルから離れたゲームの中に、そんな姿は持ち込むまい。そして、そんなナルシストはそもそも、こんなゲー

ムをしない。

リアル基準の姿は外見が人間種に見えるため、異形種PCが時折、擬態の裏技に使う程度である。

それでも戦闘中に変われはせず、町にも入れないため、およそ意味はなかった。

へろへろは、長らく性別や生活を偽ってきた。

モモンガのメールを見て、最後の最後まで、本当の己で向き合おうと考えたのだ。

それが、へろへろ自身の「大事な話」である。

こうして、最終日——へろへろは、敢えてリアルの己をベースとしたアバターでログインした。

そして、円卓の間で、見知らぬピンク髪の少女に出会いNPCと勘違いしたのが、数分前である。

少女の正体は己と変わらぬ事情を持った、ギルドマスターだった。

彼女——モモンガの名を冠した世界級アイテムは、奇妙な触手ともコードともつかぬもので、ちょうど胸のあたりにつながっている。

幸か不幸か、他のギルドメンバーは誰も……来なかった。

「それにしても、同じような二人だけ来るなんて運命を感じますね」

「えー、モモンガさんひよつとして口説いてる?」

くすくすと笑うヘロヘロ。

「違いますよ! 第一ペロロンチーノさんとかいたら、騒いで落ち着いて話せなかったじゃないですか」

「あー、言えてる。わたしもだけど、モモンガさんも変な目で見られちゃったかな?」

「私は——あー、でもそうですね、外見はそうですし」

二人とも十分に口りに分類できる姿である。

ターゲッティングされること間違いない。

そして、たっち・みー、やまいこのようなメンバーなら……もつと面倒な話になっただろう。

「それにしても、この姿であっちのスライムの名前はちよつと変だね。フルネームはさすがにダメでも……んー。名前ならいいよね? わたしは沙耶。あとちよつとの時間だけど、素の友達ってことでさ」

「あ——あ、はい。私は、さとりと呼んでください」

ここではお互い、スライムと骸骨で思い出を築いてきた。

今はオフ会気分だ。

本名を……一部名乗るくらいいいだろう。

「それにしても、沙耶さん……私より幼い姿ってことは……体、相当まずいんですか？」
モモンガ——さとりが、心配そうに言う。

会った時から思っていたが、敢えて避けた話題だ。

「うん……お互い様だけだね。さとりさんも、かなり弄られてる？」

「これは……母と離婚した父の趣味で……」

「あー、そっち」

二人とも、俯いてしまう。

リアルはつらく、厳しい。

二人の女性を、どこまでも貪り尽くしてくる。

だから、どちらも男性と詐称してここに来ていたのだ。

同じ女性のメンバーにも打ち明けられず。

モモンガは、ギルドマスターにまでなってしまった。

「……もう、時間が近づいてきましたね」

「眠いし、本当はすぐログアウトするつもりだったんだけどね。モモンガさんの正体知ったら、目が覚めちゃったよ」

嘘だ。

沙耶の肉体はもうずっと眠っていて——夢を見ているだけ。それでも労働をさせられる現代社会だが……。

限界も近づきつつあるのだろう。昏睡時間は増えつつある。

「はは、最後は玉座の間にもいきましようか。この姿で、スクリーンショットを撮るのはナシですけどね」

「……そうだね」

リアルについて考えると、二人とも重い空気になってしまう。

どちらも少なからず……ろくでもない現実を抱えている。

だから、女性メンバーにも己の正体を明かさずいたのだ。

同情されても、空気が重くなるだけだったから……。

それでも、長年の思い出を共にした相手が、己とわかりあえると知ったのだ。

少しでも時間を共有したい。

肉体や神経の休息よりも……精神の休息を優先したい。

互いにそう思い、傷をなめ合うように席を立った。

「ギルド武器——スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンも持って行こうよ」

「そうですね。これもみんな、がんばって作った……え？」

玉座の間に行く前に……と、さとりは己の背後に安置されていた杖に手を伸ばすが、

止まる。

「ええええええ!!」

「ど、どうしたんです、さとりさん! リアルで何かあったんですか!」

すわ外部干渉かと、今までの空気から連想するへロへロだが。

「これ、レプリカーラー!!」

「はあ? さとりさん、今日はずっとここにいたんでしょ?」

目をしばたたかせ、勘違いじゃないかなと首をかしげるが。

「見てください、彫刻はそっくりですが宝石が明らかにニセモノですよ!」

「いや、わたし鑑定系スキル持ってないよ」

「こんなことするのは——」

というか、レプリカを持っているのはギルドマスターと……造形を担当した……。

さとりが杖を掴み取る。

と。

『フッフ、ようやく気づいたかギルドマスター! スタッフ・オブ・アイズ・ウール・ゴウンと、玉座はいただいた! サービス終了まで、アイズ・ウール・ゴウンはオレのものだ!』

懐かしくも、聞きたくない声だった。

「るし★ふぁー、あのやあろおう!」

「ちよ、さとりさん、女の子がしちやダメな顔になってる!」

「玉座の間です! 行きますよ!」

「えっ、ちよ! ちよつと待ってー!」

リング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを使い、二人は急ぎ転移する。

もつとも、玉座の間の手前までしか転移では行けない。

「あつ、レメゲトン全部そろってる」

「最終日を会いにも来ず、こんなことしてたんですか!」

玉座の間の手前、この張本人が途中で飽きて67体だったレメゲトンの悪魔像が72体そろっている。

5つ、目立つ場所にあった空白が埋まっていた。

72体そろったらできる戦闘ギミックとかあるんだろな……とうんざりする二人。

『さつさと来なかつたから、そいつらを動かすのは勘弁してやろう! さあ来い、元ギルドマスターよ! 真ギルドマスターるし★ふぁー様の前にな!』

サービス終了まで、残り時間は5分程度。

さすがに二人でゴレム72体を殲滅するにはギリギリだ。

追加ギミックまであればなおさらに。

さすがの問題児も、顔も合わせず終わらせたくはないのだろう。

玉座の間へと続く、重厚な扉が開かれる。

その奥には世界級ワールドアイテムでもある諸王の玉座。

左右には守護者統括アルベド、第一第二第三階層守護者シャルティア。

手前には他の各階層守護者、執事セバス、戦闘メイドプレアデス。

玉座の背後にはモモンガ——さどりの黒歴史たるパンドラズ・アクター。

そして玉座に座らず、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを掲げて凶悪な笑みで立つのは……。

軍服のような衣装、剣士じみた眼帯、そして豊かに育った肉体を持つ——初対面の女性だった。

「誰だよお前ら」

「そつちこそ誰!？」

「はー……このギルド、思ってたより女性人口多かつたんだな」

「本当ですよ！ 私なんか今日はすごく悩んで来たのに！」

「いや、わたしも本当に悩んだんだよ」

「沙耶さんに言ってるわけじゃありません!」

るし★ふぁーも女性だった。

本当はこのまま、正体に驚くメンバー相手にPVPを始める予定だったらしい。

守護者を集めているのも、ギルドメンバーの人数に合わせて参戦させるつもりだったようだが。

互いの姿への衝撃で吹き飛んでしまう。

「お、なんだお前ら名前で呼びあつてるのかよ。オレも混ぜろよー」

「名乗ってから言ってくださいよ、つて、あんまりくつついたら女同士でもR18で垢BANされちゃいますよ!」

「どうせ、最後の最後で、そこまで弾いてらんないんじゃない? 残り2分きつちやつたよ」

さつきまでの重苦しい空気もどこかに行ってしまった。

三人で玉座の前に集まり、

「モモンガがさとり、ヘロヘロが沙耶か。女の子らしー名前じゃん。オレの名は天龍。フフフ、かっこいいだろう」

「はいはい、偽名乙」

「偽名じゃねーよ!」

「だいたいその恰好なんですか。わざわざコスプレして初期登録したんです?」

「あー、これな、時間なくて制服のままだったからよ」

「えっ、あの言動で警察官?」

「あー……いや、その……企業軍の方な」

最後の1分も切った中、空気が重くなってしまった。

「悪い、言わなきゃよかったな」

「るし——天龍さん、素だとマトモな人なんですネ」

「うん、ちゃんと大人じゃない」

「うるせー、ゲームくらいはつちやけたいんだよ! お前らこそ、最後は暴れて終わるつ

もりだったのに、痛ましいもん見せやがって!」

「……ごめんなさい」

「……ごめん」

「謝るなバカ、ほんとリアルは、ままならねーよな」

あと15秒。

「——これが、たっち・みーのヤツなら、お前らの居場所聞いている動くんだろけどよ。オレには……教えない方がいいぜ」

「いいですよ。最後に二人も来てくれて、満足です。別のゲームでも会いたいですね」

「次のゲームに……わたしはちよつと無理みたい」

「……」

「そつか……この戦友とも、ここまでか」

「沙耶さん、天龍さん、さようなら」

「……さよなら」

あと0秒。

「……ん？ オレの時計ズレてんのか？」

「いえ、私の時計でももう過ぎてます」

「運営、最後までしまらないねー」

5秒経過。

「GMコール……つながりません」

「メッセージへ伝言」——知り合いのプレイヤーに投げたけど全滅したぜ」

「戦闘職はやることないな。GMコールはこっちもダメ」

3分経過。

あれこれとしてみるが、どうにもならない。

「あの——」

四人目の声がする。

「あれ？ 他にも誰か……ってアルベドですか。ちよつと待つてくださいね」
「はい」

しばし間が空く。

答えたさとりが硬直する。

天龍がぎよつとした顔で、彼女の名を呼んだ。

「アルベド？」

「なんでしよう、るし★ふぁー様。いえ、先ほどの会話からすると天龍様とお呼びするべきでしょうか」

「え、なんで……？」

アルベドが、心配そうに三人を見ている。

さとりは硬直したままだ。

沙耶はおろおろと困惑するばかり。

「御三方が女性だったとはびっくりであります、このシャルティア・ブラッドフォールン。つい先ほどるし★ふぁー様に——」

「あんたは黙ってなさい！」

「どうやら至高の御方は、不測の事態に巻き込まれている様子。今は指示を待つべきですよ」

「前衛ノ身デハ役立テヌ様子。我が剣ヲ必要トナサレレバドウカ、ゴ用命ヲ」
「ヘロヘロ様……」

階層守護者らが、ヘロヘロに造られたソリュシヤンが。

それぞれに言葉を紡ぐ。

三人は呆然とした顔で彼らを見て。

そして互いの顔を見た。

「NPCだよな」

「NPCですよ」

「うん、NPCが……」

「NPCがしゃべってるうううううう
!!!!」

2：るし★ふあーは二度裏切る

「NPCがしやべってるううううう!!!」

三人は困惑と不安でびったりと身を寄せ合い、叫んだ。

NPCたちは、何か粗相があったかと、取り乱すしかない。

だが、その場の混乱は次の瞬間におさまる。

「痛っ!」

「溶ける溶ける!」

「ちよ、オレ両方喰らってる!」

モモンガ——さとのりのパッシヴスキル〈ネガティブ・タッチ負の接触

へろへろ——沙耶のパッシヴスキル〈原初の溶解〉。

特に、沙耶のそれはダメージを与えつつ伝説級以下の装備も溶かす。

生産職のるし★ふあー——天龍が両方を喰らえば、痛いのは当然だ。

天龍とさとのりの衣服は無惨に半ば溶け。

肌こそダメージは見えないが、服は半裸状態である。

「(っ)(っ)(っ)めん! えーと、えーと、あれ? パッシヴ止められる?」

「本当ですね……それにしても、どうしてフレンドリーファイアが……」

相互ダメージを与えうる状況は、範囲魔法でまずいことになる。

攻勢防壁なども、解除すべきかと悩むが。

その前に、さとりと沙耶は、目の前でゆれる、かろうじて先端の隠された果実に気づいた。

「……あれ?」

「あれ?」

不思議そうに首をかしげ、手を伸ばす。

「お、おい、お前ら何してやがる」

天龍としては取り乱さずにいられない。

バストの平坦な二人が、豊満な彼女のそれを揉み始めたのだ。

「いや、るし——天龍さん。今、悲鳴あげた時に、私たち思いつきくつついたでしょう?」

「わたしなんか、思いつきり天龍さんのおっぱいに顔埋めてただけど……」

二人の言わんとすることがわかった。

『ユグドラシル』において、R18行為の基準は厳しい。

アカウントの性別や年齢で行為にOKが出たりしない。

「確かに変だな……」

天龍も両手で、二人の尻を掴んでみる。

「ちよ、なにお尻掴んでるんですか!」

「天龍さんのチカン! パツシヴ戻すよ!」

「お前らが先にオレの胸揉んだんだろが!」

「さ、沙耶さんまでお尻、揉まないでっ」

怒鳴り合いつつも、三人とも離さない。

しばし、じゃれ合いを兼ねた状況確認が続く。

だが、ここには他の多くの目もあるのだ。

「ああ、目の毒でありんす。この身も混ぜていただければあ♥」

「あの腰の動かしよう……二人とも下着が食い込んできているわね」

「もうちよつと近くで匂いを嗅がせてほしいっすよねえ」

「へろへ——沙耶様にそんなことしないでよ!」

「あんた達ねえ……」

再び最初に我に返ったのは、さとりである。

己の体とつながった世界級アイテム——真紅の宝珠は今、第三の目の如く周囲の状況を知覚していた。

NPCたちのアレな会話も、はつきり見え、聞こえているのだ。

「……あの、天龍さん。一部のNPCの視線がなんかアレなんですが」

「ほ、ほんとだ視線以外も……アレだよ。っていうか、アレってアレでしょ……？」

手を止め、ジト目で天龍を見るさとり。胸元から伸びる紅い玉にも瞳のような裂け目
ができ、目が睨みつけている。

沙耶は背後のNPC……の一部に、怯えてすらいた。

天龍が目をそらした。

「何かしたんでしよう、天龍さん」

「この状況もまさか……」

この姿と、一見頼もし気な態度で忘れていたが。

目の前にいるのは、るし★ふぁー。

アインズ・ウール・ゴウン最大の問題児であり。

ついさつきまで、謀反PVPをするつもり満々だったのだ。

「バカ！ こんなこと起きるって思うわけねーだろ！」

「それはそうかもしれないが……何かしたんですよね？」

「ソリュシャンはマトモ……みたいだけど、アレはアレだよね？」

再び、天龍が目をそらす。

そらした先に……さとのりの紅い玉と、沙耶の顔があった。

「アバターこそリアル寄りですけど、スペックはオーバーロード時と同じですから」

「そうそう、こう見えても沙耶は古き漆黒の粘体エルダー・ブラック・ウーメなんだからね！」

さとのりの胸から触手じみたものでつながった世界級アイテムが。

沙耶は肩あたりから形がくずれ、無理やり首が伸びている。

ゴレムクラフターだった天龍は、いかにリアルで戦闘経験豊富でも……ゲーム上では生産職メイン。

戦闘参加も少ない。

反応速度も含め、実戦で最凶級だった二人に勝てるはずがないのだ。

「うぐ……」

ぐぬぬ顔で追い詰められてしまっていた。

NPCから距離を取り、玉座の影で三人、ぼそぼそと話をする。

「オレはな、今日は休暇とったから朝から階層守護者とプレアデス全員、ここに集めてたんだよ」

「ギルド乗っ取りのためですか」

「いーじゃねーか、最後だしよ」

「まあ、そこはいいですよ。お祭りとして悪くないと思いますし」

「だろ？」

「じゃあ、ソリュシャンについてるアレ何？」

沙耶は真顔である。

怒りに合わせてどろどろと体の変容したり泡立ったり触手が生える幼女の様子は、かなり怖い。

「ほ、ほら、オレ、レメゲトンの悪魔像配置した後も、ずっと時間切れ寸前まで待つてたわけじゃん」

「そうだね」

「ヒマだったから、NPCの設定テキストとか読んでたんだよ」

「……まさか」

「ぎよ、玉座にいるじゃん？ ギルド武器持つてるじゃん？ だからちよつとな、一部のキャラだけ……その」

「設定書き換えてたの？」

「書き換えてないって！ すぐ消せるように最後に付け足したただけだよ！ タブラさんのアルベドの設定が面白かったから、マネして……」

「え？ アルベドってどんな設定ついてたんです？」

「最後に『ちなみにビッチである』って」

「うわあ……タブラさん……」

「……で、わたしのソリュシャンに、なんて書き足したの？」

笑顔とは本来……。

「ソリュシャン以外にもですよね？ 少なくともアルベドとルプスレギナは間違いありませんよね？ 他は誰を書き換えたんですか？」

さとりが冷静に言うが、視線は冷たい。

ほんの少し、黙秘を望んだ沈黙が流れるが。

二人の視線は、天龍を容赦なく貫く。

やがて観念し、元凶たる彼女は口を開いた。

「アルベドと、シャルティアと、アウラと、プレアデス6人に……『実は両性具有で目上の女性に欲情する』って」

「はあああ!?!」

「長年のパートナーが男とくつついて寂しかったし……ハーレム気分とか味わいたいじゃん……」

「天龍さんそっちの趣味だったんですか？」

「だからさつきも、いやらしい手つきで……」

「うるせーな！ オレの趣味に口出しすんなよ！」

「じゃあ、わたしのソリュシャンに変な設定足さないでよ！」

「だって……こんなことなるって思わなかったし……」

さすがに天龍も本気で凹んでいた。

調子に乗りやすく、トラブルメーカーだったが、本気で取り返しのつかないことは……彼女視点ではしてこなかった……つもりなのだ。

「けど実際、あの子たち思いっきり股間にテント作ってますよね……欲情って言っても節度なさすぎでしょう」

そう、スカートのガードが甘いアルベドとルプスレギナ、ソリュシャンには。

股間に屹立が浮き彫りになっている。

特にアルベドの白ドレスは、隆々としたものを浮き上がらせ。

先端に沁みまでできつつある。

アウラのストラックスもよく見れば膨らんでいた。

言動からすれば、シャルティアや他のプレアデスもスカートの中は同様なのだろう。

「あそこまで欲情してくるとはなあ」

「天龍さんよだれ……ああ、わたしのソリュシャンにあんなものがついちやうなんて

……」

「どうせなら、パンドラズ・アクターの設定変えて欲しかったんですけど」

己の造ったNPCをチラと見て。

さとりは大きくため息をつく。

彼は今も、変なポーズをとっていた。

「しゃべれるようになったし、話し合いたいけど……近づくの怖い……」

「敵対する様子はねーし、なんならオレがあいつらに体を……」

「ただの願望じゃないですか……とりあえず地上で他のプレイヤー探しましょうよ」

「こそこそと三人で話し。」

一応の方針をまとめていく。

一応ギルドマスターとして、スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手に、さとりが玉座に座る。

沙耶と天龍は左右に立った。

ささつと、NPCらが整列する。

だが、三人の脚線……何より半裸のさとりと天龍は際どい衣装のままである。

そんな二人を見上げる状況ゆえ、女性陣の股間は未だ屹立したままだ。

(うつ……シュール)

何とかスルーして、さとりはNPCたちに声をかける。

「るし★ふぁーこと天龍さんが、あなたたちを呼んだそうですね。状況は覚えていますか?」

「はっ、天龍様がギルドマスターの地位を篡奪すべく、我々を戦力として集められました。その際に私やシャルティア、アウラ、プレアデスは、天龍様の欲望に奉仕すべく在り様を変えております」

軽く頭を下げつつ、アルベドが報告する。

体が動くごと、ドレスの白いスカートに擦れ、アレが脈打っているのが丸見えである。
(そんな堂々と突き出してないで、少しは前屈みにでも、なつてなさいよ……)

さとりとて、夜の営業職として、さんざん体中を老人に舐めまわされ弄られてきた身なのだが。真面目な顔でそんな風にされると、反応に困る。見ている方が羞恥プレイであつた。

NPCでなければ、アルベドが露出嗜好者になつたと思つたろう。

変な笑いがこみ上げるのを噛み殺し、眉間にしわをよせてNPCらを見下す。

そして、自身のすべき操作を繰り返しつつ。

適当にそれっぽい言葉が続ける。

「そうですか。天龍さんによる篡奪は失敗に終わりました。このギルドの主は、引き続きこのモモンガ——いえ、さとりが行います。我々三人の名前変更は他のNPCにも伝えてください。異議のある者はいますか？」

全員が跪き、深々と頭を下げ……ほぼ土下座に近しい姿勢となる。

やたら長くて太いアルベドは、先端が顔につかないかと心配になるほどだ。

「ないようですね。引き続き——」

とりあえず解散させてナザリツクを守らせておこうとするが。

「お待ちください」

冷たい男の声が遮った。

女性陣が性的な目を向けてくるため、相対的に信頼性の上がったデミウルゴスである。

「至高の御方たる天龍様が、処罰を得ぬのは仕方ありますまい。しかし我らは、命令であろうとさとり様への謀反に加担した身。然るべき処罰をいただきます」

他のNPCも頷いた。

「……そうですか」

さとりが首をかしげる。

胸からつながる紅いソードアイも蠢き、睨むように瞳を開く。

デミウルゴスの言葉に対する反応ではない。

先刻から何度も、設定変更のウインドウを開こうとしているが、できないのだ。

「天龍さん、代わってください」

書き換えた者でなければいけないのだろうか、天龍と玉座を代わる。

「天龍さんの篡奪を、成功と認めましょう。これで処罰は必要ありませんね」

「さとり様!」

NPC全員が愕然とする。

まさか己らを処罰させぬためだけに、ギルドの支配者を降りると言うのか。

己の言葉が、慈悲深いさとりにもこのような行動をとらせたかと、デミウルゴスは自害せんばかりの形相だ。

さとりとしては、面倒なので適当に言いつつ、本来の作業をしているだけである。

天龍がやる気なさそうに玉座に深々と座り。

スタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを握り。

何度か軽く振って見せた。

設定を変えられた女性陣は、何かまた変更が……と息を飲むが。

「はー……ダメだな。さつきはできたのによ。オレにや、そんな権限はねえらしい」

すぐに天龍が肩をすくめた。

さとりにギルド武器を渡し。

玉座をゆずる。

「そうですか……残念です」

要するに、天龍も設定書き換えができなかったのだ。

が——NPCはそうは受け取らない。

「我々のためにあのような……なんと慈悲深い！」

「まさに互いを信頼し合うがゆえの……！」

「素晴らしイ光景だ！」

NPCは全員感涙し、深く頭こゝろを垂れる。

これでナザリックの主が変わったなら、さとりの行動の責任を取るべく自害せんとし

ていたデミウルゴスの感動は特に大きい。

そして。

付け加えられた設定が『目上の女性に』であるため、相手が偉大で格上と証明すれば

するだけ——女性陣の欲情は昂ぶる。

下げた頭に反比例して、彼女らの肉竿は上を向き、激しく脈打っていたのだ。

「……さとりさんってすごいんだね」

明らかに偶然と天然でNPCを感涙させるギルドマスターに。

第三者視点で眺めていた沙耶は、別の溜息をついていた。

問題は、設定を戻せそうにないこと……いや。

それ以上のもっと大きな問題がある。

「やたら見せつけられたアレのせいで忘れてたけど、今の状況は本当に何なのかな？

触感とかリアル過ぎておかしいよ。電脳誘拐とは思えないし……わたし、活動限界ギリギリだったはずなのに、なんだかすごく体調いいんだけど」

思い出させるように、沙耶がさとの耳元に囁きかける。

「そういえば私も、昨夜は腕を入れられて、外れた股関節を無理やり戻した状態でしたが

……下半身何ともありませんね」

「……お前ら生々しいこというなよ。さっきのダメージの痛みはちよつとあるんだよな」

「それは私もありますね……リアル肉体はどうなってるんでしょう」

「もしかして昔、アーカイブで見た娯楽小説みたいな状況なのかな」

「現実を捨てて異世界について類ですか？ それなら願ったり叶ったりですが」

「……一人なら夢かなって思うけどな」

「三人いるもんねー。わたしが一番そゆ夢見そうな立場だけど」

「私だって首絞めプレイで見たことありますよ」

「オレも熱線銃で撃ち抜かれて……って、こゆ話やめようぜ」

「そう、ですな」

「オレが言うことじゃないけど、あいつら何とかしてやるべきじゃねーか？」

チラ、と天龍がNPCらを見る。

三人が小声で話す間も、NPCらはひれ伏している。

アルベドは自分の先端の匂いを嗅いでいるようにしか見えない姿勢だが……。

「こほん……あなたたちNPCは、私たちの命令を絶対と受け取っているようですね」

玉座に座ったさとりが言う。

「はい！ 無論です！ 御方の命令に背く者など、ナザリックにはおりません！」

食いつき気味に涙声で叫ぶデミウルゴスに。

他の守護者、メイドらも顔を上げ、口々に賛同する。

「けっこう。あなたたちのおかげで、私たちの日々は楽しく、また素晴らしく彩られています」

「心から礼を言いますよ」

これは、さとりだけでなく……沙耶、天龍も同意するところだ。

三人で深々と、NPCらに頭を下げる。

「その上で知りなさい。私たちは今、未曾有の問題に巻き込まれている。だからこそ、天

龍さんも……ほんの戯れとしての謀反をとりやめ、私と協調することとなりました。沙耶さんも、この状況に困惑しています」

二人が深く頷く。

「戯れ……だったのですか？」

啞然とした様子で、デミウルゴスが口を開いた。

「ああ。悪いな。オレがギルドマスターになつても、最後はさとりに返すつもりだったんだ。これは、ちよつとした祭り、イベントとしてのものだったんだよ。お前ら全員を集めたのも、何人のメンバーが来るかわからなかったからだしな」

天龍が補うように言った。

「もう、そのためにわたしのソリュシャンに変なのつけて！ どうせ返す前に、さとりさんと私にエツチなことさせるつもりだったんでしょ！」

「ふふ、違いありませんね」

「その時は、オレも混ざってやるつもりだったがな！」

軽く冗談めかして、沙耶が言った。

深刻な謀反ではなかったと示すように、さとりも軽く応じ。

天龍も会話に混ざったが。

「……うつ」

いくつかの小さな呻き声がした。

アルベド、シャルティア、ルプスレギナ、ナーベラルが、びくんびくんと身を震わせている。

謀反が成功した時を想像して、彼女らは思わず射精してしまったのだ。

「え……えーと。セバスとコキュートスは……ナザリックから出られますか？　ちよつと地上を調べてきてください。すぐへ伝言^{メッセージ}つなぎます」

「は、ははっ」

「仰セノ通りニ」

気まずそうに、さとりが男性二人に指令を出す。

「マーレ、パンドラズ・アクターは第一階層に待機しつつ、モンスターを召喚して地上をさらに遠方まで調べてください。他のプレイヤーを見かけたら魔法で報告を。攻撃はしないように。外敵が来た場合、プレイヤー如何を問わず防衛戦に入ってください。その際には外に出たセバスやコキュートスも呼び戻すよう、お願いします」

「わ、わかりました」

「偉大なるン御方の姿ッ！　お借りいたしますッ！」

ふにつと萌えほどではないが、さとりは指揮官として有能だ。

今いる三人では、さとりが指揮をせざるをえないとも言えるが……。

「デミウルゴスは、ナザリック内に侵入者がいないか、問題発生していないか、点検をお願いします。終わったら、マーレたちに合流してください」

「承知いたしました」

それぞれが背を向け、玉座の間を退出した。

「……沙耶さん。ソリュシャンと二人で自室待機。問題なさそうなら一般メイドたちの様子を見ておいてください。あと、食堂で私たちのご飯の用意もしておいてください」
「ん。いいけど……えと、さとりさん大丈夫？」

「大丈夫ですよ。慣れてますし」

今も、彼女らの視線が全身に絡みつくのを感じる。

「……アルベド、シャルティア、ルプスレギナ、ナーベラルは私と来なさい。他は天龍さんが責任を持って処理してあげてくださいね」

「悪いな」

女性NPCが反応する前に、天龍が口を挟む。

「悪いと思うなら今度から変なことしないでくださいよ。設定を決めたみんなに示しがつきません」

「オレが言ってるのは、お前になんだがな……まあ、きつかったらその四人もオレが何とかするから」

「はいはい。じゃあ行きますよ。この部屋の床にこぼさないようしてくださいね。さすがにここで、そういうことは許しませんよ」

そして三人は……ナザリツクの女性陣を連れ、各自の部屋に向かった。

3 : モモンガの眼が問題だ!

モモンガ——さとりに案内されるように。

アルベド、シャルティア、ルプスレギナ、ナーベラルが、その私室に入る。

彼女ら全員が、初めて入る至高の御方のプライベート領域。

その榮譽に感動し。

その空気に興奮し。

「……………はあ……………」

四人はそれぞれ身を震わせ。

下半身を脈打たせた。

特にアルベドは、ぬふうとか変な鼻息まで発している。

(……………また、出してる)

さとりは内心で溜息をついた。

天龍に触れた後から感じた妙な落ち着き——アンデッドの特性たる精神抑制効果が必要れば、パニックに陥っていただろう。

(す……い……………におい……………)

四人が入ると、室内の空気は生臭く、ぬめったものになる。

特に白い衣装に浮き上がらせたアルベドのそれは、噴き出すそれに合わせて内側から跳ね上げられんばかりである。

また、ルプスレギナのそれは他に比べ液状なのか、手で押さえて外に噴き出ないようにしている。黒いスカートの前が、より黒く濡れていた。

シャルティアやナーベラルのスカートの中も、大差ないのだろう。

(……四人の共通点は……そういうこと、なんででしょうね)

四人の製作者。

そして他の製作者。

比較すればすぐわかる。

アウラの作者、ぶくぶく茶釜は女性だ。

ユリの作者、やまいこも女性。

ソリュシヤンの作者、ヘロヘロも女性だった。

エントマの作者、源次郎は上辺でなく根っからの非リアル愛好者だった。エントマの異形性はその表れであり、生々しい欲求や人間関係は好まなかったと記憶している。

シズは情動的に幼く設定されていたはずだ。作者のガーネットの性癖はともかく、シズ自身は純真無垢な愛らしさを求められていたはず。

そして今、さとりの前にいる四人の作者。

タブラ・スマラグディナ、ペロロンチーノ、獣王メコン川、式式炎雷——この四人は、わかりやすい童貞だった。

年季の入ったソロプレイヤーで。男の多い（と思われていた）ギルド内では、猥談じみた雑談をよくしていた。さとりもプロとして、童貞看破には自信がある。その目から見ても、明確な童貞組が、彼の四人なのだ。

特にペロロンチーノはさとりの客として訪れ、何もせず時間いっぱいまで会話だけして帰った筋金入りである。ユグドラシルでランキングに入ったギルドメンバー、姉が声優——などと話すから、知りたくもない正体を知ってしまった。

もつとも、そんな彼だからこそ、さとりは変わらぬ友情を抱けたわけだが。今回のサービス終了時、さとりのサプライズへの反応を最も見たかったのも……彼、ペロロンチーノだった。

（まあ来なかつたんですけれど。と……そんな場合じゃありませんね）

妙なことで仲間の顔ぶれと様子を思い出してしまった。

深々と……今度はわざと顔に出して、溜息をつく。

四人に呆れ、失望した様子も明らかに。

「待機」

冷たい声で、「今まで通りに」扱う。

今度は怯えたように身を震わせ、四人が等間隔に整列するが。

上下関係を思い知らされるだけで興奮するのか、下半身は違う反応を示していた。

「はあ……四人とも、どうなっているか見せてみなさい。アルベドも、そんなに浮かび上がらせるなら、露出させた方がまだましでしょう」

命令して、露出させてみる。

「さ、さとり様が私のものを見て……♡」

「ああ、み、見られてしまうであります♡」

「このような臭いを、申し訳ありません♡」

「……っ」

三人が下着をおろし、スカートをたくしあげる中。

メイド服の構造上、ナーベラルは衣装を解除して裸体を晒すしかない。

「なるほど……アルベドのは既に見えていましたが。シャルティアもすごいですね。ルプスレギナが長いのは人狼だからでしょうか？ ナーベラルはかわいいですね。少し安心しました」

冷たい目……というより、作業的な目で検分する。

全員が既に出したものでどろどろに汚れている。

肉体がモモンガのデータ通りなら、形状が何であれ、問題はないはずだ。物理無効だから、巨人やドラゴンの相手をしてもらってもダメージを受けまい。したくはないけれど。

とはいえ、リアル経験からいって、アルベドとシャルティアは危険なサイズだ。ルプスレギナも相応の覚悟が必要である。

ナーベラルは、ありがたい息抜きだった。

（製作者のものと関連付けては、式式炎雷さんに失礼ですね。そういえばペロロンチーノさん、恥ずかしがって下着から脱がなかったのか。彼のサイズを知っていれば検証材料にもなったのでしょうか……）

内心で考えつつ。

「ふう……私はセバスと連絡を取ります。しばらく情報のやりとりをします。その間、貴方たちは可能な限り、自身で処理をしておきなさい」

さとりは、自ら、登録時のロリータ風衣装を脱ぎはじめ。

着くずし、肌を晒して、煽情的なポーズをとりながら。

未だ鎮まらぬ四つの肉塊から目をそらし。

胸から触手につながる世界級アイテム、サードアイで見下すと。

通信を始めた。

「へ伝言」——セバス、様子はどうです。危険があるなら……」

（それが、さとり様。外は沼地ではなく平原になっております。空は第六層以上に満開の星空です。周囲にモンスターや会話可能な存在は確認できておりません。戦闘力の無い小動物がいくらかいるのみかと）

ヘルヘイムではない。

あの世界にそんな場所はないはずだ。

「えっ？ わかりました。引き続き調査をお願いします。コキュートスと離れず、別行動は——ぶぎゃっ」

餅の塊のような熱いものを顔にぶつけられ、さとりはのけぞった。

今まで装甲付きスカートの中で出されていたナーベラルの白濁——いや、黄濁が、モモンガを襲ったのだ。

（さとり様?!）

セバスが何事かと焦って問いただしてくる。

「あなたたち、顔にかけるのはやめなさい!——ああ、ごめんなさい。今……ちよつ、天井もやめなさいっ!」

アルベドとルプスレギナが天井に当てると、そのままさとの頭上から降り注ぐのだ。

体に直接かけてくるシャルティアが一番マシであった。

(さとり様、大丈夫でございますか?)

「だ、大丈夫。とりあえず一時間ほど調べて問題なければ入り口のマーレたちに合流してください。デミウルゴスからナザリック内の報告も来て……おぶつ……き、来ているはずですから。問題なければマーレの情報を中心に外部調査お願いしますっ」

一方的に言つて、通信を切つた。

既にさとりは、カスタード&フレッシュクリームデコレーション状態である。

いや、頭から粥をかぶつた状態と言うべきか。

真紅のソードアイが巨大な白玉団子と化している。

しかも四人ともまだまだ自己処理の最中だ。

「何回出すんですか……顔はダメですよ。天井もダメです。ここになら、かけていいです。情報伝達の邪魔はしないでくださいよ。終わったら、きちんと満足させてあげますから」

本気で溜息をつきつつ無表情で四人に言い、下着を脱ぎ。

さとりは脚を開き。

その奥も開いて見せる。

四人が血走つた目を向けてくるのがわかつた。

(タブラさん、ペロロンチーノさん、メコン川さん、炎雷さん……童貞すぎるでしょう)

……)

嫌な物悲しさを感じながら。

さとりは死んだ魚のような目で淡々と、マール、デミウルゴス、沙耶、天龍へとへ伝言^{メッセージ}をつなぎ。情報共有をしていった。

下半身に着弾衝撃が断続的に来る。

彼女らは萎える気配すらない。

下半身どころか上半身も含め、脱いだはずが白い衣装——のような粘液。

(ふふ……ホワイトドレスですね……)

通信が全て終わったら相手せざるを得ないのかなと思うと。

現実逃避気味に濁いた笑いを浮かべるしかない、さとりだった。

「あ、全員への通信終わりましたね！」

食い気味にいうアルベドの言葉も耳に入るように入らない。

「ここは第一階層守護者として、私が行かせてもらいなんし！」

「あの、私小さいので、できれば先に」

「あー、確かにナーちゃんは……」

「そうですね。早そうだし先を譲りましょうか？」

確かにシャルティアやアルベドの後では、拡がってしまおうだろう。

これからの行為について勝手に話が進むが。

さとりとしては、いろいろ逃避したい。

「いや、ここはナーベラルに違う穴を使ってもらうべきでありんす。ペロロンチーノ様曰く、三人同時相手は普通とのこと。百戦錬磨のさとり様なら、四人くらい問題ありません」

(問題ありますよ)

だが、逃避すべきではなかった。

他人事のように内心でツツコミを入れつつ。

現実味を感じられなくて。

さとりは、すばやく反応できなかった。

「なるほど。では私はファーストキス○をいただくわ」

「ぐへへ、前はいただくでありんす」

「じゃあ、私は後ろを使わせていただきますね」

「仕方ありませんね——ナーちゃん、早く代わってほしいです！ さとり様、それまで手

でお願います！」

完全に順番まで決められていく。

目の前に迫るそれに、はっと気づき言葉を発さんとする。

「いえ、お願いしますじゃ……んぶう!？」

もう遅かった。

口はふさがれ。

解き放たれた四匹の獣は、先のさとりの言葉を都合よく解釈し。

至高の躰を貪り始めたのだ。

それでも、さとりには余裕があつた。

四人が己を目上として敬っていること、間違いないのだ。

壊されはすまい。

何より物理耐性と精神完全耐性がある。

面倒な作業かもしれないが、慣れた行為。

問題はない。

なかつたはずだつた。

さとりが知らないのも無理はない。

ユグドラシルでR18行為は禁止されている。

サキュバスだって設定のみで、そんな攻撃はしない。

また、リアルなさとりは、行為に慣れていたが、それは“一方的にされる立場”に慣

れていたにすぎない。

それは待つていれば終わる。

高齢の客なら時間をかけて味わい尽くした後、一度すれば終わる。

若い客は乱暴に勝手にして、終わる。

だが、彼女らは違う。

違うのだ。

再生能力や回復魔法、種族補正と言ったファンタジーを持つ、恋愛経験皆無の童貞の夢の結晶。しかも、色に飢えた女の欲望が上書きされて、無限発情している文字通りのセックスモンスターである。

そして何より。

性的ダメージは、物理でも精神でもないらしかった。それを受ける器官の無い骨やゴレムなら別だったかもしれないが……今のさとりは、肉体上はほぼ人間と同様の器官を持つ。データとしてのみの、死の支配者^{オーバーロード}。

いつものように、終わるまで耐えているつもりだったさとりは、膨大な未知のダメージ、未知の状態異常を送り込まれてしまう。

もはや、彼女には無様に痙攣するしかできない。

「た、たいへんです、さとり様の呼吸が……脈もありません！」

「何言ってるっすかナーちゃん。さとり様はアンデッドっすよ」

「一見動かなくなっても、ちゃんと奥を叩けば反応してるでありんす……っ、んんんっ！」

ネガティブタッチ

「〈負の接触〉も使っておられない以上、まだまだ好きにしているということ。いや、私たちの一方的な行為に呆れておられるのかしら。さとり様を失望させないよう、しっかり楽しんでいただかないといただかない、と……うっ♡」

「そうでしたか。では、頑張らせていただきます……っ、あっ♡」

「反応が悪くなった気がします」

「ナーちゃん小さいっすから……」

「シャルティア、モモンガ様を回復させて」

「じゃあ〈大^{グレート}致死^{リースアル}死……って、さとり様すごい跳ねてるであります！」

「あつ、モモンガ様、その喉動かすの、いいですっ♡」

「何か言いたいんじゃないっすかね」

「とりあえず一段落、してからお聞き、しますのでっ♡」

「さとり様が、白い塊になってしまいなんし」

「揚げる前の天ぷらみたいっすねー」

「量から言うと、チーズホンデ鍋に思えます」

「顔が泡立ってるからまだ、満足なされていないと思うのだけど」

「しかし、これではさとり様の偉大さも台無しであります」

「なんか萎えちやうっすよね」

「そうだわ。至高の御方の部屋にはそれぞれ浴室もあられるはず！ 私たちの手でさとり様を清め洗ってさしあげましょう！」

「モモンガ様とお風呂……まさに憧れのシチュでありんす！」

「さすがアルベド様……天才……」

「私なら、長いから奥までしつかり洗えるっすよ！」

「やっぱり御姿を現されると、モモンガ様は偉大すぎて……！」

「わ、私はさすがに、もう、体力が」

「大丈夫っすか、ナーちゃん。回復は任せるっす！ 〈大治癒〉！」

「自動回復がないとたいへんでありんすね」

「私もサキュバスでよかったわ。とりあえず汚れたらすぐ流しつつ、このまましつかり楽しんでいただきますよう」

「はい！ がんばってさとり様に奉仕いたします」

「いや……もう……やめ」

「さとり様が拒んでいるように聞こえますが」

「いや、これはペロロンチーノ様がおっしゃっていた、おかわり要求！ まだまだ手ぬる
いつてことでありんすよー！」

「さすが至高の御方……わたし達ではまだまだ満足いただけでないのね！」

「さとり様ばねーっす！ ナーちゃんも量と勢いはすごいつすから、回復して流し込
むっすよー！」

「はいっ……さとり様に満足いただけるように……っ！」

「ぴくりとも動かなくなりなんし」

「アンデッドなら寝食不要のはずですが。お疲れだったのでしょうか」

「あれ？ アルベド様なにしてるっすか？」

「マッサージよ。お疲れならなおのことしつかりしないと。幸いマッサージ棒もある
し」

「さすが守護者統括！ その発想はなかったでありんす！」

「マツサージ中に入ってしまったてもしかたないっすよね!」

「いえ、最も酷使なされた場所を、サイズ的に余裕ある私がマツサージすべきかと」
「ナーベラル、けっこう根に持ってたのね……」

こうして、天龍と沙耶が様子を見るまで、さとりへの奉仕は終わらなかつた。